新訂

尋常小學唱歌

附奏伴

第二學年用

文部省

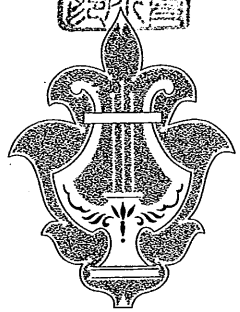
K130.7
3.1
2

新訂

尋常小學唱歌

伴奏附

第二學年用



文部省

緒　言

一、本書ハ音樂教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。

二、本書ハ毎卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。

三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常小學國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。

四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。

五、本書ノ教材排列ハ強ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。

六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

七、伴奏附ノ樂譜ヲ使用スル場合ニハ、前奏・後奏ノ如キハ時トシテ省略スルモ可ナリ。

昭和七年四月　　文　部　省

目　次

一　櫻……2
二　ラヂオ……4
三　二宮金次郎……6
四　雲　雀……8
五　折　紙……10
六　小　馬……14
七　田　植……16
八　竹の子……18
九　雨……20
一〇　金　魚……22
一一　蟬……24
一二　蛙と蜘蛛……26
一三　こだま……28
一四　浦島太郎……30
一五　ポプラ……32
一六　かけつこ……36
一七　案山子……38
一八　が　ん……40
一九　富士山……42
二〇　影法師……44
二一　紅　葉……46
二二　時計の歌……48
二三　うちの子ねこ……50
二四　雪……52
二五　梅に鶯……54
二六　母の心……56
二七　那須餘一……60

櫻

♩=112

一カスミニツヅクハハナノクモ
ニむかふーのーやまのはやまざくら

ノヤマニツモルハハナノユキ
こちらのをかのはやへざくら

ハールノシグツハウツクシヤ
やーへもひとへもうつくしや

ドチラムイテモハナバカリ
はなはこのはなさくらばな

一、櫻

一、霞につづくは花の雲、
野山につもるは花の雪、
春の四月はうつくしや、
どちら向いても花ばかり。

二、向かふの山のは山櫻、
こちらの岡のは八重櫻、
八重も一重もうつくしや、
花はこの花、櫻花。

ラ　ヂ　オ

♩=76

ー　ア　サ　ノ　ラ　ヂ　オ　ガ　マ　ウ　ー　シ　マ　ス
ニ　ば　ん　の　ら　ぢ　お　が　ま　う　ー　し　ま　す

mp

ミ　ナ　サ　ン　オ　ハ　ヤ　ウ　ゴ　ザ　イ　マ　ス
み　な　さ　ん　お　ま　ち　ど　ほ　ー　で　し　た

サ　ア　ハ　ジ　マ　ツ　タ　ラ　ヂ　オ　ノ　タ　イ　サ　ウ
さ　あ　は　じ　ま　つ　た　こ　ど　も　の　じ　か　ん

f

ミ　ン　ナ　デ　ヤ　リ　マ　セ　ウ　ゲ　ン　キ　ニ　ヤ　リ　マ　セ　ウ
み　ん　な　で　き　き　ま　せ　う　た　の　し　く　き　き　ま　せ　う

mp

二、ラ　ヂ　オ

一、朝のラヂオが申します、
「皆さんお早うございます。」
さあ始つた、ラヂオの體操。
みんなでやりませう、
元氣にやりませう。

二、晩のラヂオが申します、
「皆さんお待ちどほでした。」
さあ始つた、子どもの時間。
みんなで聞きませう、
樂しく聞きませう。

二宮金次郎

♩=100

一 シバカリ ナハナヒ ワラヂヲ ツクリ
二 ほわみを をしまず しごとを はげみ
三 カゲヲ ダイジニ ツヒエヲ ハブキ

mf

オーヤノテヲスケ オトトヲセワシ
よーなべすまして ておならひとくしよ
スコシノモノヲモ ソマツニセズニ

キヤウーダイナ カヨクカウ ーカウ ツクス
せはしいなかにも たゆまず ツとめ
ツヒニハミヲタテ ヒトヲモ スクフ

mp

テテテ ホホホ ンンン ハハハ ニニニ ノノノ ミミミ ヤヤヤ

f

キキキ ンンン ジジジ ラウラウラウ ーーー

三、二宮金次郎

一、柴刈り、縄なひ、草鞋をつくり、
親の手を助け、弟を世話し、
兄弟仲よく孝行つくす、
手本は二宮金次郎。

二、骨身を惜しまず仕事をはげみ、
夜なべ濟まして手習讀書、
せはしい中にも撓まず學ぶ
手本は二宮金次郎。

三、家業大事に、費をはぶき、
少しの物をも粗末にせずに、
遂には身を立て、人をもすくふ、
手本は二宮金次郎。

雲　雀

♩=132

mp

ピ イピ イピ イト サヘヅル ヒバリ
ぴ いぴ いぴ いと さへづる ひばり

mp

サヘヅリ ナガラ ドコマデ アガル
さへづり やんで どこへ おちた

タカイ タカイ クモノ ウヘカ
あを い あを い むぎの なかか

mf

コエハキコエテミエナイ ヒバリ
す ーがたかくれてみえない ひばり

四、雲　雀

一、ぴいぴいぴいと囀る雲雀、
囀りながら何處まであがる、
高い高い雲の上か、
聲は聞えて見えない雲雀。

二、ぴいぴいぴいと囀る雲雀、
囀りやんで何處らへ落ちた、
青い青い麥の中か、
姿かくれて見えない雲雀。

折　紙

♩= 72

mp　p　mp　p

一シロイカミデ　ナニヲラウ　—
二あかいかみで　なにをらう　—

p

ワタシノスキナ　ツルヲラウ　—
わたしのすきな　ふわをらう　—

mf　mp　p

ソヨソヨハルカゼフイタナラ
ゆらゆらおほなみよせたなら

p

タカクオホキクハバタイテ
たかくまつかなほをはつて

mf

ツウツトソラマデトンデイケ
すいすいしままではしりだせ

f　p

五、折紙

一、白い紙で何折らう、
私の好きな鶴折らう。
そよそよ、春風吹いたなら、
高く大きく
羽ばたいて、
つうつと、空まで飛んで行け。

二、赤い紙で何折らう、
私の好きな船折らう。
ゆらゆら、大波寄せたなら、
高く眞赤な
帆を張つて、
すいすい、島まで走り出せ。

原本への書き込み多し

小　馬

♩=112

f　mf

一　ハイ　シイ　ハイ　シイ　アユメヨ　コウマ
二　ばか　ばか　ばか　ばか　はしれよ　こうま

mp

ヤマデモ　サカデモ　ズン　ズン　アユメ
けれども　いそいで　つま　づく　また　いそで

mp

オマヘガ　ススメバ　ワタシモ　ススム
おまへが　ころべば　わたしも　ころぶ

mf

アユメヨ　アユメヨ　アシオト　タカク
はしれよ　はしれよ　こーろばぬやう　ーに

mf

六、小馬

一、はいしい、はいしい、
あゆめよ、小馬。
山でも、坂でも、
ずんずん歩め。
お前が進めばわたしも進む。
歩めよ、歩めよ、
足音たかく。

二、ばかばか、ばかばか、
走れよ、小馬。
けれども急いで
つまづくまいぞ。
お前が轉べばわたしも轉ぶ。
走れよ、走れよ、
轉ばぬやうに。

田　植

♩=120

ー シ ー ロ イ ス ゲ ガ サ ア カ ダ ス キ
こ う ー ゑ る て さ き も あ し ど り も

ソ ー ロ ヒ ス ガ ク ノ サ ヲ ト メ ガ
ふ ー し も そ ろ へ て さ を と め が

ウ ー タ フ タ ウ エ ノ ウ タ キ ケ バ
う ー た ふ た う ゑ の う た き け ば

ソ ロ ウ タ ッ ロ タ ヨ サ ヲ ト メ ガ ソ ロ タ
こ と し は ほ う ね ん ほ に ほ が ー さ い て

イ ー ネ ノ デ ホ ヨ リ ナ ホ ソ ロ タ
み ー ち の こ ぐ さ も こ め が な る

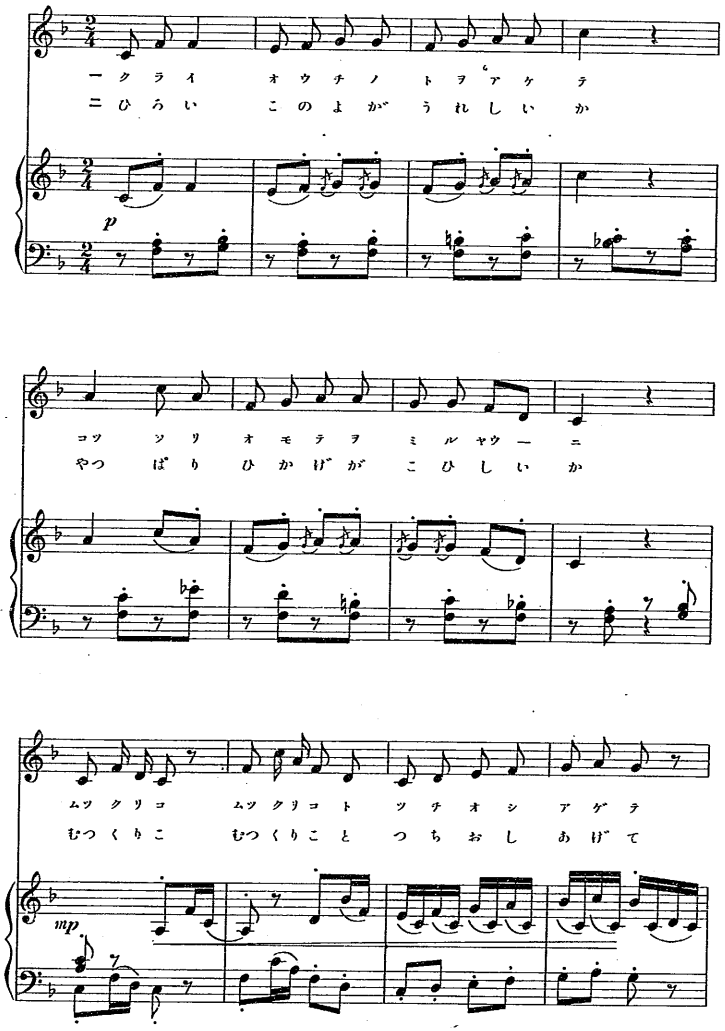
七、田植

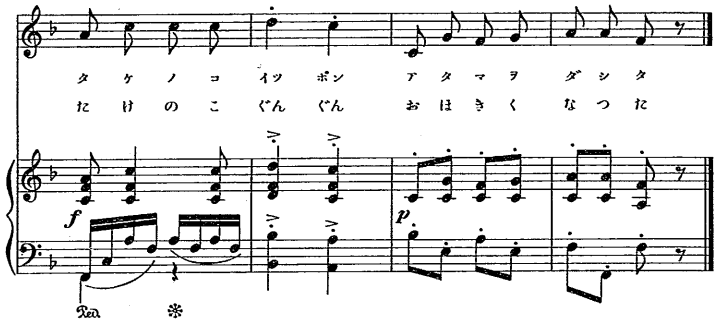
一、白い菅笠、赤だすき、
揃ひ姿の早少女が
歌ふ田植の歌きけば、
揃うた、揃たよ、早少女が揃た、
稲の出穂よりなほ揃た。

二、植ゑる手先も、足取も、
節も揃へて早少女が
歌ふ田植の歌きけば、
今年は豊年、穂に穂がさいて、
路の小草も米がなる。

竹の子

♩=84





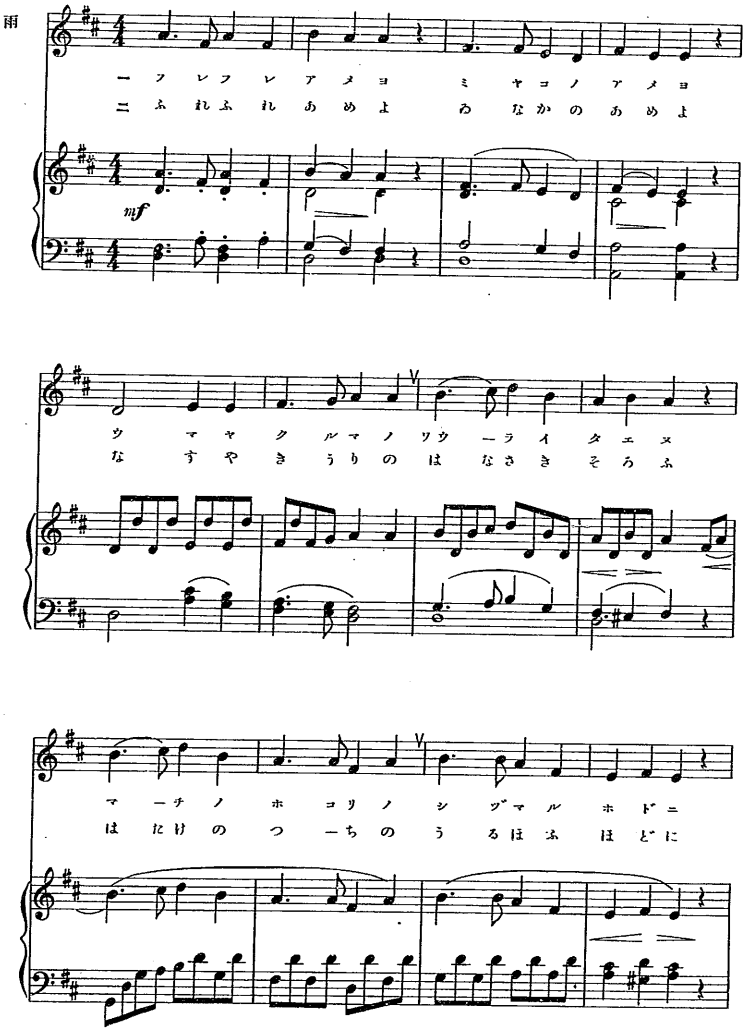
八、竹の子

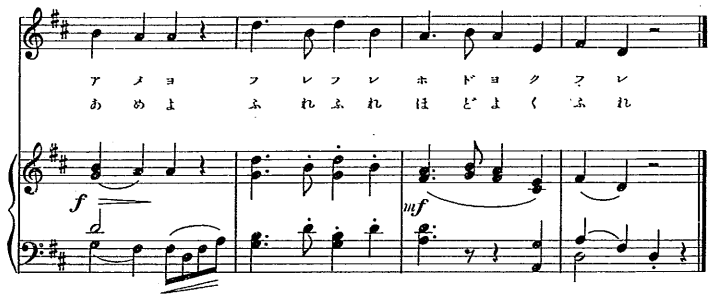
一、くらいおうちの戸をあけて、
こつそりおもてを見るやうに、
むつくりこ、むつくりこと
土おしあげて、
竹の子一本頭を出した。

二、廣いこの世がうれしいか、
やつぱり日影がこひしいか、
むつくりこ、むつくりこと
土おしあげて、
竹の子ぐんぐん大きくなつた。

雨

♩=126





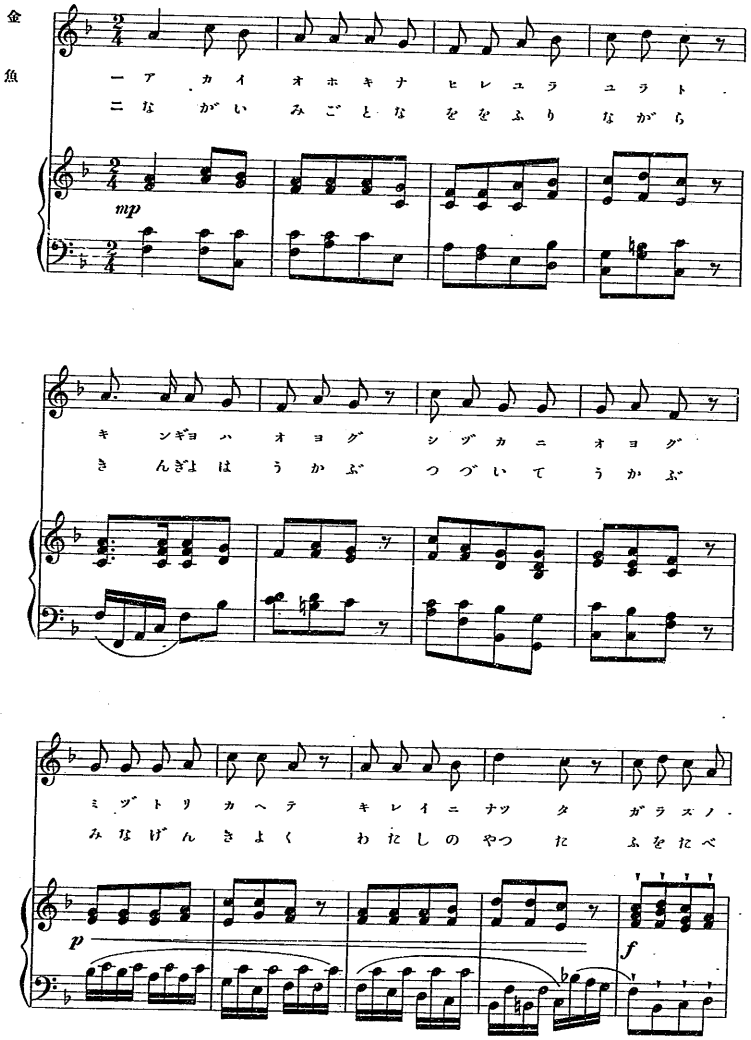
九、雨

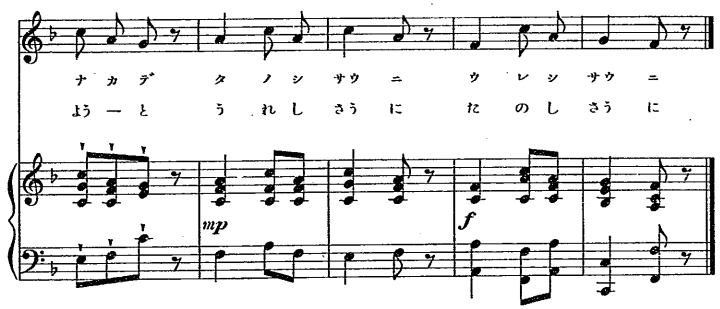
一、降れ降れ雨よ、都の雨よ。
馬や車の往來絶えぬ
町の埃のしづまる程に
雨よ降れ降れ、程よく降れ。

二、降れ降れ雨よ、田舍の雨よ。
茄子や胡瓜の花さき揃ふ
畠の土のうるほふ程に、
雨よ降れ降れ、程よく降れ。

金魚

♩=69





一〇、金魚

一、赤い大きな鰭ゆらゆらと
金魚は泳ぐ、静かに泳ぐ、
水とりかへて
きれいになつたガラスの中で、
たのしさうに、うれしさうに。

二、長い見事な尾を振りながら
金魚は浮かぶ、つづいて浮かぶ、
皆元氣よく
私のやつた麩をたべようと、
うれしさうに、たのしさうに。

蟬

♩=96

一カミナリーガ　トホクナール
二ゆふーだちーガ　ひとしきーり

フクトモナシーニ　カゼガフーク
みどりのはかーら　つゆがちーる

キトイフーキニハ　セミガナク
すずしいーこゑで　せみがなく

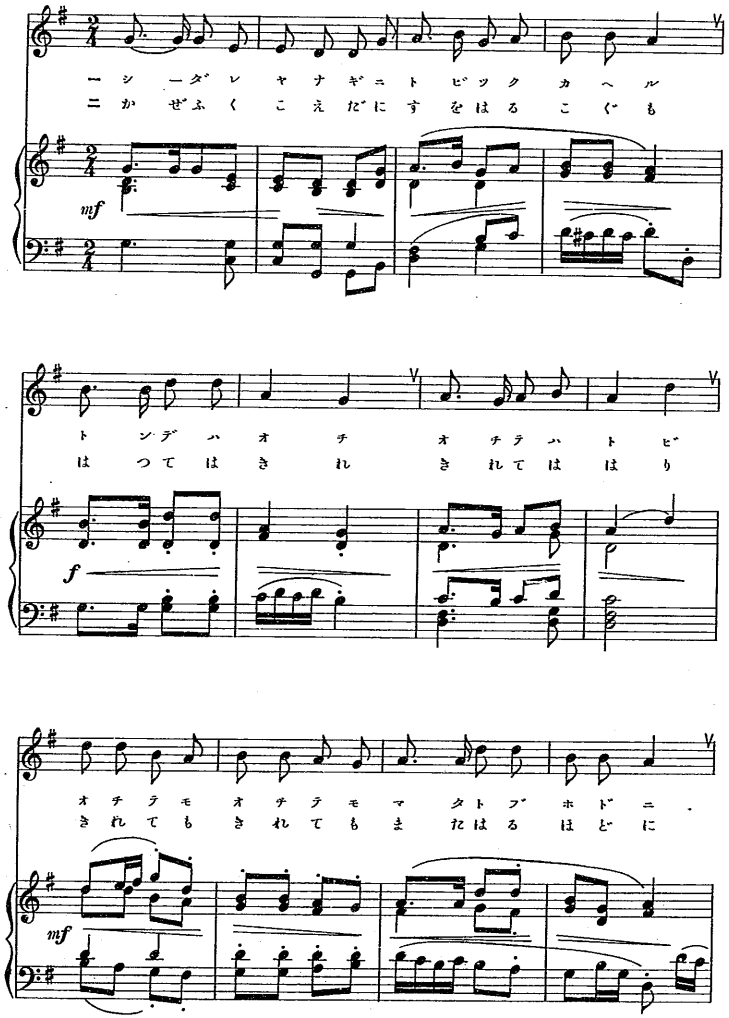
二、蟬

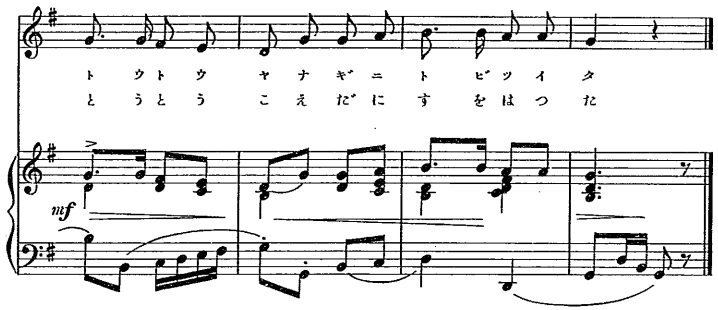
一、かみなりが
遠く鳴る。
吹くともなしに、風が吹く。
木といふ木には、蟬が鳴く。

二、夕立が
ひとしきり。
みどりの葉から、露がちる。
涼しい聲で、蟬が鳴く。

蛙と蜘蛛

♩=80





二三、蛙と蜘蛛

一、しだれ柳に飛びつく蛙、
飛んでは落ち、
落ちては飛び、
落ちても、落ちても、
また飛ぶほどに
とうとう柳に飛びついた。

二、風吹く小枝に巣を張る小蜘蛛、
張つてはきれ、
きれては張り、
きれても、きれても、
また張るほどに、
とうとう小枝に巣を張つた。

こだま

♩=104

一 オウ イト ヨ ベバ オウ イト コ ター ヘ
二 やあ いと よ べば やあ いと か へ ーし

ダ レダト イ ヘバ ダ レダト カ ヘ ース
な んだと い へば な んだと ま ね ーる

ム カフ ー ノ モ ーリ ニ ス ムモ ノ ー ハ
む かふ ー の や ー ま に す むも の ー は

ヒ トカ キ ツネ カ キノセ イ カ
ま ほふ ー つ かひ か せんに ん か

一三、こだま

一、おういと呼べばおういと答へ
誰だといへば誰だと返す。
むかふの森にすむものは
人か、狐か、木の精か。

二、やあいと呼べばやあいと返し、
何だといへば何だとまねる。
むかふの山にすむものは
魔法つかひか、仙人か。

浦島太郎

♩=100

一二三四五、ムおアかコ　カとソへコ　シひビつロ　ムさアみボ　シのテばサニ　カまキれソ　シそうッいト　ウごキこフ　ラちガはタ　マーイかレ　ハにテにバ

輕快に

mf

タたオもア　ケひトわケ　スーイとー　タやマたテ　カひゴいク　メらーへヤ　ニのめモ　ヒもシキ　ツまソむタ　レひコらマ　ラをソもテ　レどコなバ　テりニくコ

リユウ　たカみナ　ーグウ　だーめへ　ーちカ　ーづルニ　ジャウ　らトゆバ　ーしチユ　きッへ　くソふ　ウあト　キおタひシ　テもノとロ　ミしシびケ　レろミとム　バくハはリ

p

f

ユつミかタ　ーきヤーチ　ニひゲほマ　モのニもチ　カたモしタ　ナもッなー　ケつラらウ　ララララ　イーターいハ　ウゆタもオ　ツめマのヂ　クのテばイ　シうバかサ　サちコりン

一四、浦島太郎

一、昔昔、浦島は
助けた龜に連れられて、龍宮城へ來て見れば、
給にもかけない美しさ。

二、乙姫樣の御馳走に、鯛や比目魚の舞踊、
ただ珍しくおもしろく、
月日のたつも夢の中。

三、遊にあきて氣がついて、
お暇乞もそこそこに、歸る途中の樂しみは、
土產に貰つた玉手箱。

四、歸つて見れば、こは如何に、
元居た家も村も無く、
路に行きあふ人人は、顏も知らない者ばかり。

五、心細さに蓋とれば、
あけて悔しき玉手箱、
中からぱつと白煙、たちまち太郎はお爺さん。

ポ　プ　ラ

♩= 126

ポプラ

mp

一タカイソラニ　ツツタツポプラ
ニくらいよるに　つつたつぽぷら

mf

ユフヒニモエテ　エダエダノ
てんまでとどく　くろいかげ

キンノキノハガ　キラキラト
くろいこずゑが　ひそひそと

mp

ウレシサウ　ニ　フルヘテル
おほしさまと　はなしてる

mf

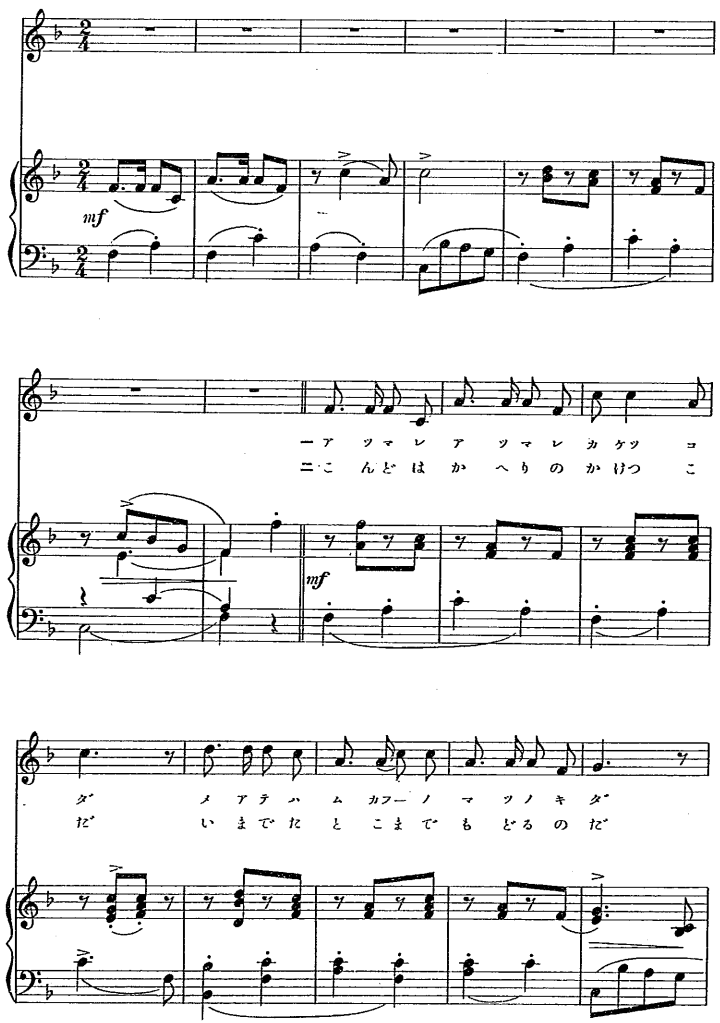
一五、ポプラ

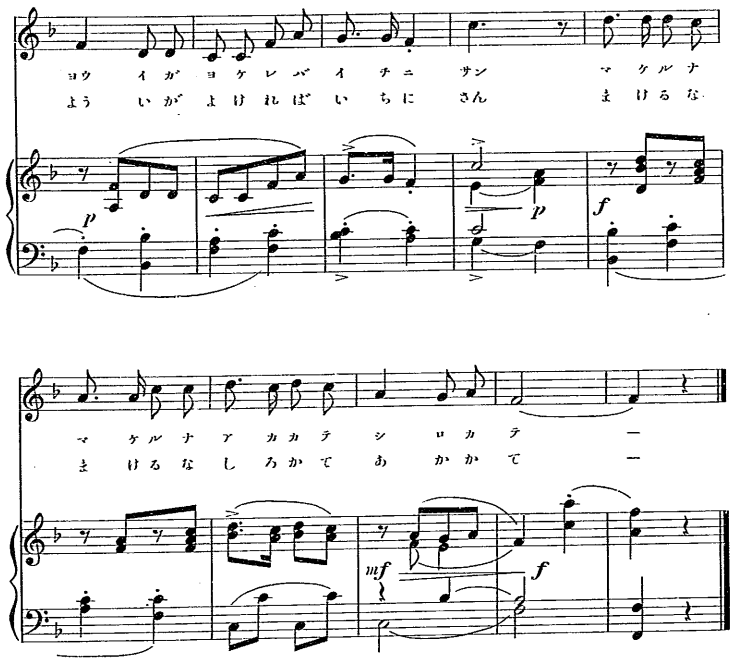
一、高い空に、つつ立つポプラ、
夕日にもえて、
枝枝の
金の木の葉が
きらきらと、
嬉しさうにふるへてる。

二、暗い夜に、つつ立つポプラ、
天までとどく
黒い影、
黒い梢が
ひそひそと、
お星さまと話してる。

かけつこ

♩=120





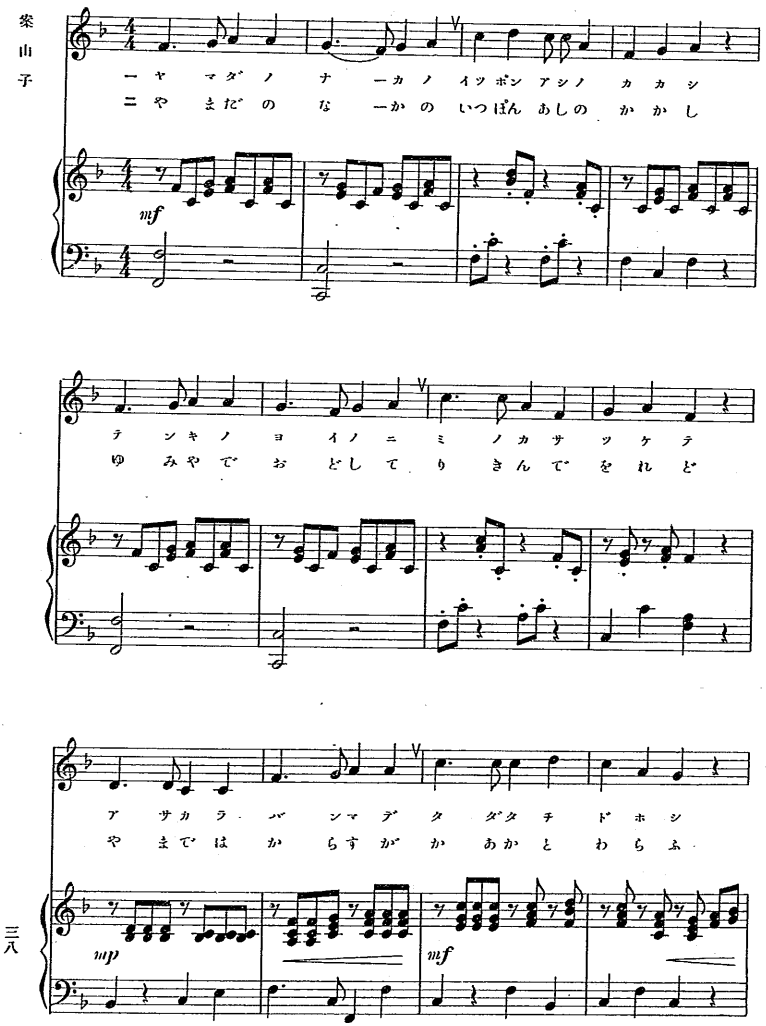
一六、かけつこ

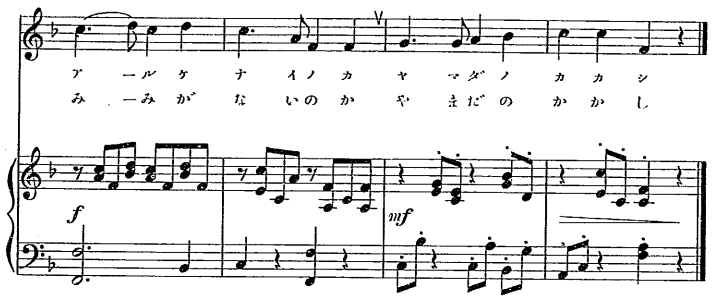
一、集れ、集れ、かけつこだ。
目あては向かふの松の木だ。
用意がよければ、一二三、
まけるな、まけるな、
赤勝て、白勝て。

二、今度はかへりのかけつこだ。
今出たとこまで戻るのだ。
用意がよければ、一二三、
まけるな、まけるな、
白勝て、赤勝て。

案山子

♩=112





一七、案山子

一、
山田の中の一本足の案山子、
天氣のよいのに蓑笠着けて、
朝から晩までただ立ちどほし。
歩けないのか、山田の案山子。

二、
山田の中の一本足の案山子、
弓矢で威して力んで居れど、
山では烏がかあかと笑ふ。
耳が無いのか、山田の案山子。

がん

♩=112

一 ガンガクル ガンガクル トンデクル
二 そらをとぶ くもをとぶ ないてとぶ
三 ガンガイク ガンガイク トンデイク

mp

オホキナガンハ サキニ チヒサナガンハ アトニ
さきのがんも ないた あとのがんも ないた
チヒサナガンハ サキニ オホキナガンハ アトニ

mf

ガンガクル ガンガクル トンデクル
そらをとぶ くもをとぶ ないてとぶ
ガンガイク ガンガイク トンデイク

mp

一八、がん

一、雁が來る、雁が來る、飛んで來る。
大きな雁はさきに、小さな雁はあとに。
雁が來る、雁が來る、飛んで來る。

二、空を飛ぶ、雲を飛ぶ、鳴いて飛ぶ。
さきの雁も鳴いた、あとの雁も鳴いた。
空を飛ぶ、雲を飛ぶ、鳴いて飛ぶ。

三、雁が行く、雁が行く、飛んで行く。
小さな雁はさきに、大きな雁はあとに。
雁が行く、雁が行く、飛んで行く。

富士山

♩=96

mf　p　poco ril.

一　アタマヲクモノウヘニダーシ
二　あをぞらたかーくそびえたーち

mf a tempo　mf

シハウーノヤーマヲミオローシーテ
からだにゆーきのきものーきーて

カミナリサーマーヲシタニキク
かすみのすーそーをとほくひく

mp　mf

フジハニツポンイチノヤマ
ふじはにつぽんいちのやま

f

一九、富士山

一、あたまを雲の上に出し、
四方の山を見おろして、
かみなりさまを下に聞く、
富士は日本一の山。

二、青空高くそびえ立ち、
からだに雪の着物着て、
霞のすそを遠く曳く、
富士は日本一の山。

影法師

♩=80

一 ピヤノノ オトニ アシナミ ソロヘ
二 なかよし どうし ととを ひいて

mf

ミン ナデ ナカヨク イウ ギヲ スレバ
ゆふ ひの こみちを かへろと すれば

mp

マツ クロクロノ カゲボフシ
なが いなが い かげぼふし

mf

ヤツ パリ ソロツテ ヲドツテル
やつ ぱり ならんで ついて くる

二〇、影法師

一、ピヤノの音に足並そろへ、
みんなで仲よく遊戯をすれば、
まつくろくろのかげぼふし、
やつぱり揃つてをどつてる。

二、仲よし同志手と手をひいて、
夕日のこみちを歸ろとすれば、
ながいながいかげぼふし、
やつぱり並んでついてくる。

紅　葉

♩=92

一　アキノユフヒニテルーヤマモミーヂ
二　たにのながれにちりーうくもみーぢ

mp

コイモウスイモカズーアルナカニ
なみにゆられてはなーれてよつて

マツヲイロドルカヘーデヤーツタハ
おかやきいろのいろーさまーざまに

mf

ヤマノフモトノスソーモヤウー
みづのうへにもおるーにしき

mp

二、紅　葉

一、秋の夕日に照る山紅葉、
濃いも薄いも數ある中に、
松をいろどる楓や蔦は、
山のふもとの裾模様。

二、溪の流に散り浮く紅葉、
波にゆられて離れて寄つて、
赤や黄色の色さまざまに、
水の上にも織る錦。

時計の歌

♩=92

一ト ケイハ ア サカラ カツ チン カツ チン
二と けいは ばんでも かつ ちん かつ ちん

オンナジ ヒビキデ ウゴイテ ヲレドモ
われら が ねどこで や すんで をるまも

チツトモ オンナジ トコロヲ ササズニ
ちつとも やすまず いきを もつがずに

バンマデ カウシテ カツ チン カツ チン
あさまで かうして かつ ちん かつ ちん

三、時計の歌

一、時計は朝から、かつちん、かつちん、
おんなじ響で動いて居れども、
ちつともおんなじ所を指さずに、
晩までかうして、かつちん、かつちん。

二、時計は晩でも、かつちん、かつちん、
我等が寢床で休んで居る間も、
ちつとも休まず、息をもつがずに、
朝までかうして、かつちん、かつちん。

うちの子ねこ

♪=104

ウ チ ノ コ ネ コ ハ カ ハ イ イ コ ネ コ
うち の こねこ は か はい い こねこ

mf

ク ビ ノ コ ス ズ ヲ チリ チリ ナ ラ シ
くび の こすず を ちり ちり なら し

mf

ス ー ソ ー ニ カ ラ マ ー リ タ モ ト ニ ス ガ ル
ま ー り ー と じや れて ー は えんから お ち る

f　mf　p

二三、うちの子ねこ

一、うちの子ねこは
かはいい子ねこ、
くびのこすずを
ちりちりならし、
すそにからまり、　たもとにすがる。

二、うちの子ねこは
かはいい子ねこ、
くびのこすずを
ちりちりならし、
まりとじやれてはえんからおちる。

雪

♩= 92

mp

ユキヤコンコ　アラレヤコンコ
ゆきやこんこ　あられやこんこ

mf

フツテハフツテハズンズンツモル
ふつてもふつてもまだふりやまぬ

ヤマモノハラモワタバウシカブリ
いぬはよろこびにはかけまはり

カレキノコラズハナガサク
ねこはこたつでまるくなる

f

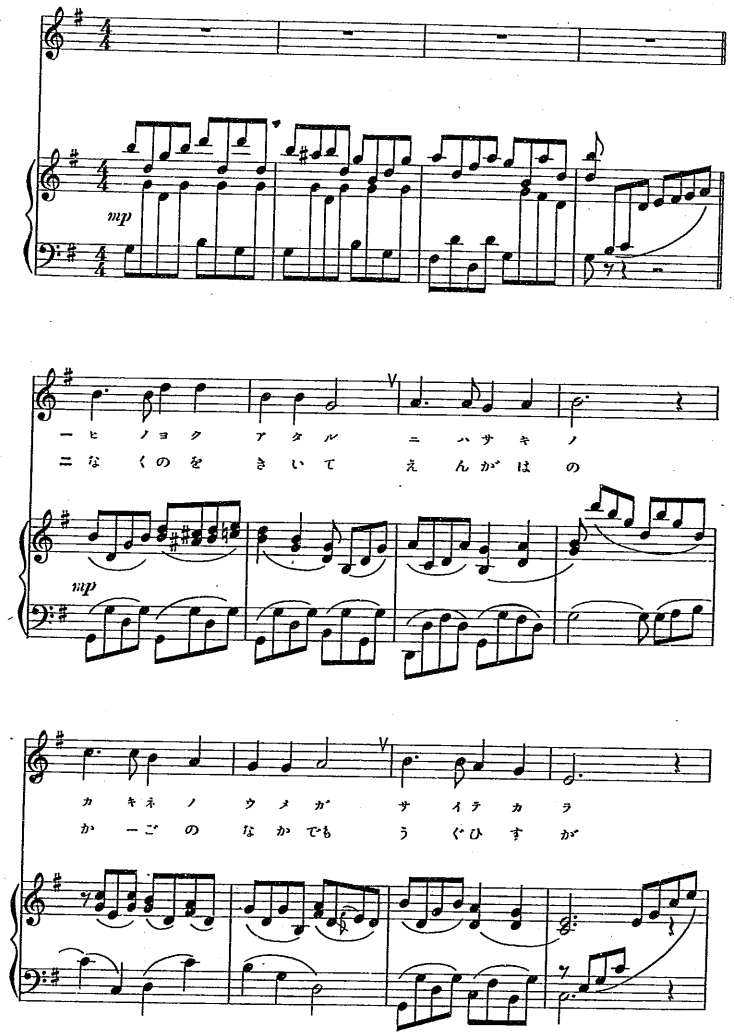
二四、雪

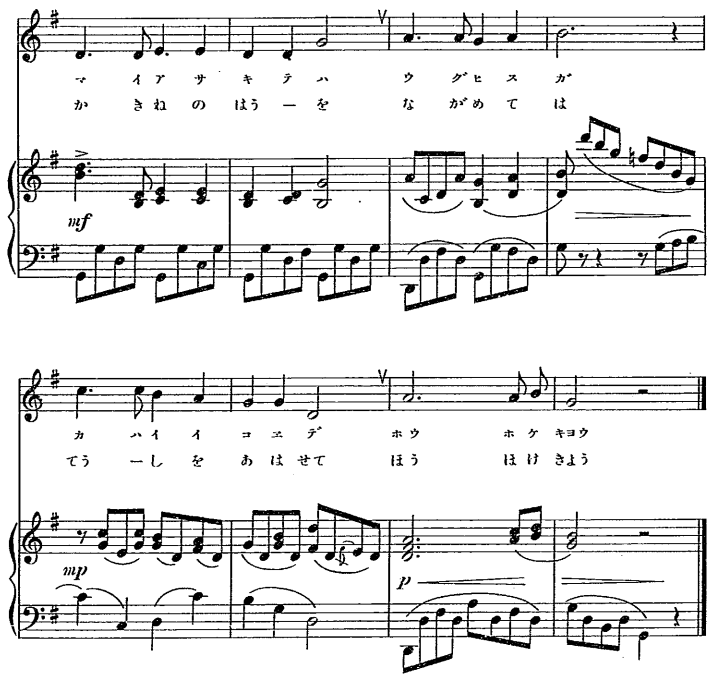
一、雪やこんこ、霰やこんこ。
降っては降っては、
ずんずん積る。
山も野原も綿帽子かぶり、
枯木残らず花が咲く。

二、雪やこんこ、霰やこんこ。
降っても降っても、
まだ降りやまぬ。
犬は喜び庭駆けまはり、
猫は火燵でまるくなる。

梅に鶯

♩=100





二五、梅に鶯

一、日のよくあたる庭前の
垣根の梅が咲いてから、
毎朝來ては鶯が
かはいい聲で
ほうほけきよう。

二、鳴くのを聞いて、縁側の
籠の中でも鶯が
垣根の方を眺めては、
調子を合はせて
ほうほけきよう。

母の心

♩=80

ーアサーハヤクカラ　キドバタデ
ニよるーおそくまで　おくのまに

mf

ハハハセイダス　アラヒモノ
ははせいだす　はりしごと

クラヒノナカニ　アールハナーニ
ひざのうへには　なーにがあーる

mf　mf

コレハタラウーノコクラノハカマ
これはおはるのはれぎのはおり

mp

タラウーキノワーハウンドウークツイデ
おはるあしたはひなさまままつり

ドーロニヨゴシタコノハカマ
きーせてやりたいこのはれぎ

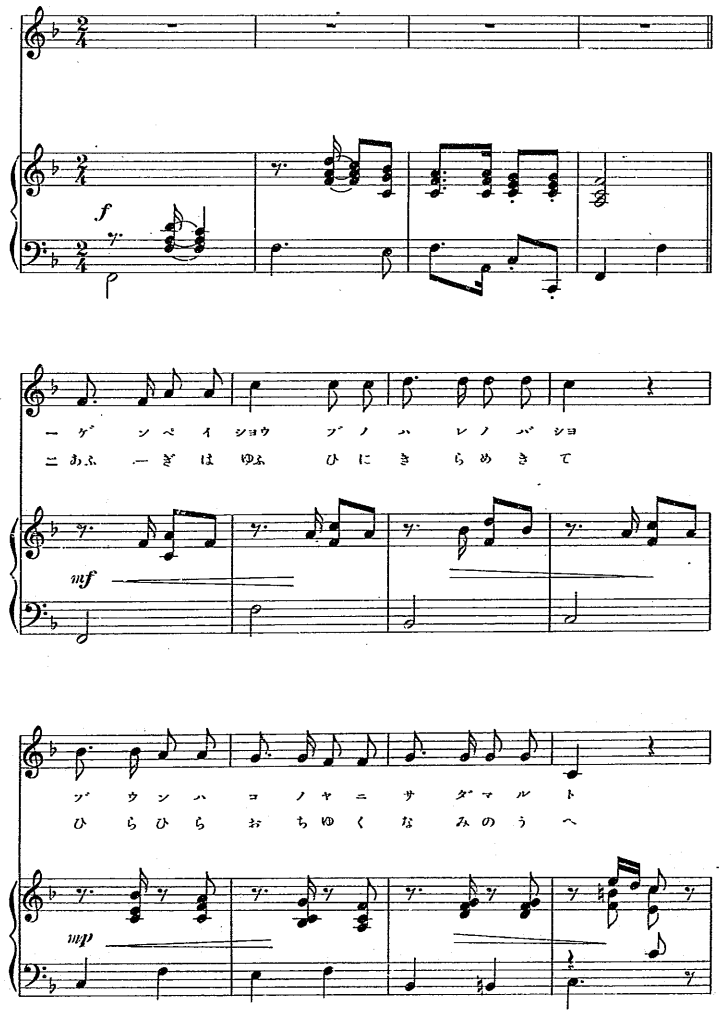
二六、母の心

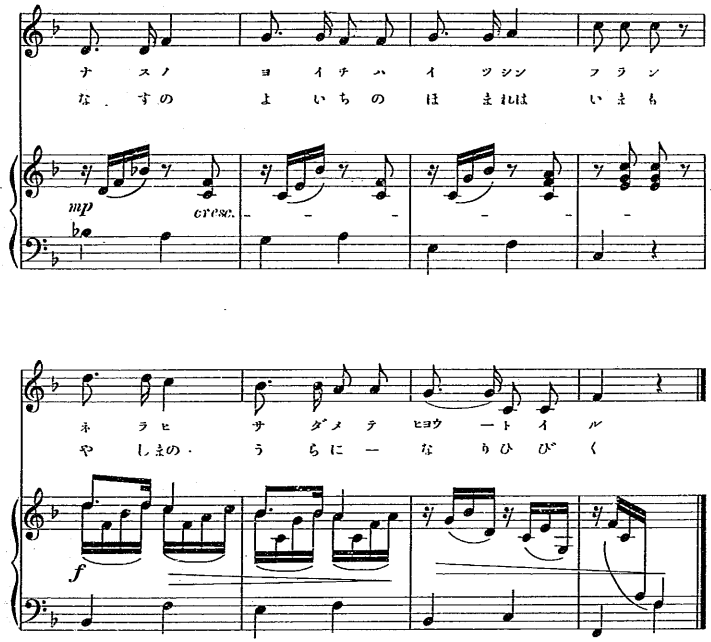
一、朝早くから井戸ばたで、
母はせいだす洗物。
たらひの中にあるは何。
これは太郎の小倉の袴。
太郎昨日は運動會で、
泥によごしたこの袴。

二、夜遅くまで奥の間に、
母はせい出す針仕事。
ひざの上には何がある。
これはお春の晴着の羽織。
お春明日は雛様祭。
着せてやりたいこの晴着。

那須餘一

♩=88





二七、那須餘一

一、
源平勝負の時の場所、
武運はこの矢に定まると、
那須餘一は一心不亂、
ねらひ定めてひようと射る。

二、
扇は夕日にきらめきて
ひらひら落ちゆく波の上、
那須餘一の譽は今も、
屋島の浦に鳴りひびく。

新訂
尋常小學唱歌
伴奏附

不許複製

11

第二學年用　定價金參拾四錢

昭和七年五月二十四日　印刷
昭和七年五月二十八日　發行

著作權者　文部省

東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行者　大日本圖書株式會社

代表者　專務取締役　杉山常次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　大橋光吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社

東京市京橋區銀座一丁目五番地
發行所　大日本圖書株式會社
振替貯金口座〔東京二一九番〕電話京橋二七三番二七四番

1989. 3. 31 寄贈 教育史料センター寄贈